

## 中国のユダヤ教をたどる

徐 新

---

### 要旨

中国は極東で唯一、ユダヤ人が1000年以上にわたって住み続けてきた国である。ユダヤ人が中国の領土に最初に足を踏み入れて以来、この国では途切れることなくユダヤ教が信仰されてきた。ただしユダヤ教は、現代中国のいわゆる「5つの公認宗教」には含まれていない。本稿では、中国社会に暮らすユダヤ人に焦点を当てながら中国におけるユダヤ教の歴史をたどり、その背景を考察するとともに、儀式、祝祭、習慣などの日常生活に注目してユダヤ教の信仰と実践のあり方を検証する。またユダヤ教に対する中国当局の姿勢についても簡単に触れておく。

キーワード：ユダヤ教、中国社会、ディアスポラ、宗教政策

中国は極東で唯一、ユダヤ人が少なくとも1000年以上にわたって住み続けてきた国である。そのために中国におけるユダヤ教の信仰は他には見られない独自の特徴を持つ。

歴史的に見れば、中国におけるいわゆるユダヤ人ディアスポラは、時代時代でユダヤ人コミュニティの場所を変えながら、1000年にわたって脈々と続いてきた。ユダヤ教は布教型の宗教ではないため、ユダヤ教徒との結婚による改宗以外に、中国人がユダヤ教に改宗したという確かな事例は存在しない。従って「中国のユダヤ教」という場合は、あくまでも中国社会に暮らす過去および現在のユダヤ人の信仰とその実践のみを指すものと理解していただきたい。

ユダヤ民族とユダヤ教の関係は、他のどの宗教の場合とも異なるために、本稿のテーマについて理解を促し、その主旨を明確に打ち出すためには、まず両者の関係について簡単に説明することが必要だろう。よく知られているように、ユダヤ教はユダヤ民族によって確立された宗教であり、唯一の神をあがめる一神教信仰である。また3000年以上の歴史を持つ最古の一神教として、同じ一神教であるキリスト教とイスラームの誕生にも多大な影響を及ぼしている。ユダヤ人の歴史と文化は特異な発展を遂げてきたために、「ユダヤ教」という言葉の持つニュアンスは非常に広い範囲に及ぶ。もともとこれは「すべてのユダヤ人」を意味する言葉であり、言いかえればここにはユダヤ文明全体という意味が含まれている。つまり「ユダヤ教」という言葉は単に「ユダヤ人の信仰」だけでなく、おそらくもっと大切なこととして、具体的なユダヤ民族の日常生活そのもの

のも含意しており、それゆえに一般的にユダヤ文化、あるいはユダヤ文化の核心を表す語として頻繁に用いられているのである。その意味でこれは中国人の文化と日常生活の核心を含意する「儒教」という言葉と似ていると言える。

ユダヤ民族をユダヤ民族たらしめているユダヤ的思想、精神、宗教そして文化は、連続と続く歴史の中で渾然一体となり、もはや切り離すことは不可能に近い。少なくとも近代以前までは、ユダヤ教から離れたユダヤ人はもはやユダヤ民族とは呼べないとして、ユダヤ民族とユダヤ教は不可分の関係にあるということがよく言われている。またユダヤ人にとってユダヤ教は生活様式そのものでもある。ユダヤ人の生活は、信仰の有無にかかわらず、飲食から結婚、死に至るまですべてがユダヤ教と深く結び付いている。新年や逾越祭等の祝祭はすべて宗教儀式とみなされているが、これらは同時にユダヤ人の文化や習慣の一部でもある。従って、中国におけるユダヤ教の歴史をたどり、信仰のあり方を検証するために、本稿は2つの面に焦点を当てて考察を加えていく。1つは中国におけるユダヤ人とその背景であり、もう1つは祝祭の儀式、教育、カシュルート（ユダヤ教の食の規定）、埋葬の習慣などの日常生活面である。またユダヤ教に対する中国政府の方針の有無に触れ、その内容についても論じたい。

中国に暮らすユダヤ人が中国社会にユダヤ教の信仰を持ち込んだことは明らかである。本当の意味でのユダヤ教の信仰は、総じて言うならユダヤ人の集団的活動であるため、具体的な信仰のあり方をたどるには、中国におけるユダヤ人コミュニティの歴史について考察を深めることが必要である。

歴史研究により、開封、杭州、寧波、揚州、寧夏等、中国の多くの都市でユダヤ人が暮らし、コミュニティを形成していたことが分かっている。しかし残念なことに開封以外のユダヤ人コミュニティについては十分な文献や資料が残されておらず、その痕跡がすっかり消えてしまったため、これらのコミュニティでユダヤ教がどのように信仰されていたかを探ることはもはや不可能である。つまり、近代以前の中国<sup>1)</sup>におけるユダヤ教のあり方を検討するには、開封のユダヤ人とその信仰に着目する以外には方法はないのである。

開封のユダヤ人自身の記録によると<sup>2)</sup>、彼らが中国にやって来たのは宋の時代（960年－1279年）であった。ユダヤ人たちは開封の地で安定した快適な生活基盤を築き、徐々に経済力を蓄えていった。1163年、彼らは礼拝の場となる建物をこの地に建設する。もっとも第二神殿の破壊以降、ユダヤ教は「持ち運び可能」になり、どこででも礼拝することができたのであるが。開封のユダヤ人が建設したシナゴグは、ユダヤ教の信仰が中国で開始されたことを示す動かぬ証拠となっている。

近代以前までは、開封のユダヤ人の内面生活の中で信仰生活が最も重要な位置を占め

ていたことに疑いの余地はない。現にユダヤ教の信仰があればこそ、ユダヤ人はユダヤ人として生きることができたのであり、またその存在感を外部の者に示すことができたのである。こうしたことから、今日に伝わる文献や資料のほとんどがこの祈祷の場に言及していることは驚くにあたらない。

食に関する規定は総じてよく守られていた。ユダヤ人コミュニティ（ケヒラー）で暮らす者誰もが規定に従うわけではないことは今も昔も同じであり、必ず例外は存在した。中国の官吏に任せられ、開封から遠く離れた任地に派遣された場合など、規定を守ることが難しいこともあり、また宮廷の宴会に招待されれば中華料理に口をつけないわけにはいかなかった<sup>3)</sup>。驚嘆すべきは、食の規定を守らない者がいたことではなく、むしろこれほど多くの者が規定を遵守していたということである。

ユダヤ人コミュニティが食の規定を固守していたことは、漢民族が開封のユダヤ人を「筋を取り除く宗教」を意味する「挑筋教」の名で呼んでいたことから明らかである。創世記にはヤコブが天使と格闘する物語が語られ、その中でユダヤ人は腿のつがいの上にある腰の筋を食べることを禁じられている。開封のユダヤ人たちはこの故事に由来する習慣を守り、食肉用の動物を屠ったときには、必ず筋を取り除いていた。そうした慣行を目の当たりにした近隣の漢民族はその理由が分からず、ユダヤ人を「挑筋教」と呼ぶようになったのである。開封のユダヤ人は、自分たちの宗教がこのように呼ばれることを決して不快に思わなかった。それどころか開封に暮らすムスリムとの差別化がはかれるとして、むしろこう呼ばれることを歓迎していた。というのも開封には当時ユダヤ人よりもはるかに多くのムスリムが暮らしていたからで、彼らもまたアブラハムをはじめとする聖書の登場人物を始祖と呼び、豚肉食を禁じていた<sup>4)</sup>。

近代の中国でユダヤ教信仰が開始された時期は、もっと明確に特定することができる。それは19世紀後半、中国が西欧列強に門戸開放を強いられた時期であった。清の雍正帝がすべての外国人宣教師に国外退去を命じる決断を下した1725年から1840年に至るまで、中国は外国人の居住を禁じた閉ざされた社会であった。事態を一変させたのは、中国での阿片取引をめぐる中国とイギリスの間で勃発した第一次阿片戦争（1839年－1842年）である。中国はこの戦争に敗れ、1842年、戦争を終結させるために南京条約への調印を余儀なくされた。南京条約およびその追加条約（1843年）の下で、中国は香港をイギリスに割譲するとともに、国内の5つの主要港をイギリスとの通商のために開港し、この港湾都市にイギリス人が住むことに合意した。これらの都市には、程なくイギリス国旗の下で居留地が建設された。他の列強もイギリスに続き、以来中国には新天地を目指す外国人が続々と押し寄せた。その中にはユダヤ人もおり、その後100年かけ

て、最初は香港と上海で、次いでハルビンや天津など多くの都市で、中国におけるユダヤ人コミュニティの拠点が形成されていった。

ユダヤ人の中国流入には幾つかの波があった。

第一波は19世紀後半にバグダッドやボンベイからのセファルディ系ユダヤ人の流入で、彼らはビジネスチャンスを探求めて上海や香港をはじめ、新たに門戸を開いた中国の諸都市に定着し、20世紀初頭には確固としたユダヤ人コミュニティを築き上げた。第二波はロシアや東ヨーロッパ出身のアシュケナズ系ユダヤ人である。そのほとんどはまず中国北東部のハルビンやその隣接地帯に到着し、その後多くの者が中国南部に下って行った。豊かな暮らしを求めてこの国に渡って来た者もいたが、それはごく少数で、大多数は20世紀初頭のボグロム（ユダヤ人虐殺）やロシア革命から逃れてきた難民であった。第三波は、ヨーロッパ系ユダヤ人難民である。1937年から1940年の間に上海に上陸したユダヤ人の数はおよそ2万人にのぼり、上海はナチ支配下にある国から脱出してきた何千人ものユダヤ人の避難所となった。そして最後の波は、1940年代初頭に神戸からやって来た1000人前後のユダヤ人である。彼らはポーランドなどの東ヨーロッパ諸国の出身で、第二次世界大戦中に在リトアニア日本領事の杉原千畝が発給した通過ビザでホロコーストから逃れてきた難民であった。

総合すると、1845年から1945年にかけてビジネスチャンスや安全な新天地を求めて中国に渡ってきたユダヤ人の数は4万人強にのぼる。近代中国にユダヤ人が到来したことにより、この国のユダヤ教信仰は大きく力を付け、ユダヤ人が暮らす中国の諸都市には12を超えるシナゴークが建設された。本稿では上海を例に、近代中国のユダヤ教信仰について検討を進めていく。

上海でユダヤ人のコミュニティ生活が始まるのは、1840年代にセファルディ系ユダヤ人がこの都市に定住してまもない時期のことである。1862年にはサッスーン家がユダヤ人墓地の用地を寄贈し<sup>5)</sup>、これが上海で最初のコミュニティ挙げての事業となった。

セファルディ系ユダヤ人は正統派のユダヤ教徒であり、宗教の実践を生活の中心に位置付けていた。信仰に身を捧げ、くずした書体のヘブライ文字で書かれたユダヤ・アラビア語を共通語とするこの集団は、中国の中でもひととき異彩を放つ存在であり、誕生から割礼、バル・ミツバ（成人式）、結婚、死に至るまで、生涯を通してユダヤ教の教えが厳格に実践されていた。

シナゴークでの儀式と礼拝の参列はユダヤ教信仰の重要な部分を占める。信徒の要望に応じて、このコミュニティでは1887年に初のシナゴークが建設され、ベイト・エル（神の家）と命名された。また1899年にはシェアリット・イスラエル（残れるイスラエ

ル)と名付けられたシナゴグが上海の礼拝およびトーラーの学習の場として使用されるようになった<sup>6)</sup>。

信徒の増加により1910年代には礼拝の場が手狭になってきたことから、ジェイコブ・サッスン卿とその兄弟のエドワード卿が、ジェイコブの亡き妻、レイチェルにちなんでオヘル・ラケル(ラケルの天幕)と名付けられたシナゴグを寄贈した。これは上海で最初の礼拝専用の大型建造物で、1921年1月23日に献堂されている。広々とした会堂は700人を収容することができ、大理石の柱が聖櫃の横に並び、会堂を見下ろす大きなバルコニーが設けられている。聖櫃には30巻ものトーラーの巻物が収納されていた。このシナゴグは「東洋随一」と称えられ、今も当時の姿のまま上海に残されている。

1932年、セファルディ系ユダヤ人コミュニティは、アシュケナズィ系ユダヤ人のラビ・ブラウンを彼らの会衆のラビに任命した。この一件は、セファルディ系ユダヤ人の間で、自分たちの伝統に固執する気持ちが薄れてきたことを表している。こうして旧来の慣習は一部改められ、聖歌隊やアシュケナズィ系の旋律、説教、ヘブライ語の原文と英語訳が併記された祈禱書などが新たに導入された。ただしそれ以外、セファルディ式礼拝の形式は本質的に一切変わっていない。

一方アシュケナズィ系ユダヤ人のコミュニティは独自の伝統と儀式を堅持し、自前の礼拝場を運営していた。1902年には上海のロシア系ユダヤ人がシナゴグ委員会を立ち上げ、1907年、借地にシナゴグを開設した。このシナゴグは著名なロシア系ユダヤ人、モーシェ・グリーンバーグにちなんで、オヘル・モーシェ(モーシェの天幕)と名付けられた。

1925年、ルバヴィッチ・ハシディズム派のラビ・メイア・アシュケナズィが、上海のロシア系ユダヤ人の精神的指導者の座に就いた。ラビ・メイア・アシュケナズィは1926年から1949年まで上海の主席ラビを務め、この間、救済や教育や宗教に関する問題を先頭に立って指揮し、アシュケナズィ系ユダヤ人コミュニティの代弁者として優れた手腕を発揮した。また借地に建てられた小さなシナゴグでは増加するコミュニティ人口の要望に応えることができないと判断し、シナゴグの改修に奔走した。こうして1927年、本格的なシナゴグが誕生した。旧建物の二階部分が取り払われ、屋根を支える柱が設置された。また男女同席を禁じる正統派ユダヤ教の教えに従い、女性信徒専用の礼拝の場として中二階が設けられた。オヘル・モーシェはロシア系ユダヤ人コミュニティの初期の礼拝の場として、長い年月にわたりその役目を果たした。1941年4月には、アシュケナズィ系ユダヤ人コミュニティに1000人を収容できる近代的なシナゴグが建設された。これはロシア系ユダヤ人に「新シナゴグ」と呼ばれ、1956年までここで礼拝が行われていた。

ユダヤ人のアイデンティティの重要な位置を占めるのが教育である。また教育は、青少年期のユダヤ人にとって最も輝かしい体験の1つでもある。ユダヤ人が上海に定住して間もない頃には、父から息子へ知識を伝えるという伝統的な教育が一般的に行われていた。家庭教師が雇われることもあった。こうして子どもたちは祈りの言葉を覚え、聖書へブライ語を身に付けたのである。その後ユダヤ人住民の増加に伴い、1902年にシェアリット・イスラエルはタルムード・トーラー（ユダヤ教学校）を付設し、入学した6人の男子に、初年度はユダヤ・アラビア語を使ってヘブライ語、ユダヤ教を教えた。ヨーロッパから難民が流入してくると、その子弟が多数この学校に通うようになり、1944年には生徒数が300人にまで増えて上海の複数の地区にサブキャンパスが設けられた。また難民専用の学校として、一般にはカドゥーリ・スクールの名で知られる上海ユダヤ人青少年協会学校が開校された。イズマール・フライジנגガー・スクールも難民の子弟向けに設立された学校で、規模は小さいが、宗教教育に力を入れていた。こうした教育機関は、戦時中、ユダヤ人青少年にユダヤ教の基礎を教え込む上で非常に重要な役割を果たした。このように学校の中でヘブライ語の授業や伝統的なユダヤ教教育が行われていたという事実は、ユダヤ人がユダヤ教によって結ばれた一民族であることを如実に物語っている<sup>7)</sup>。

## 戦後中国のユダヤ人

日本の敗戦は、中国のユダヤ人に数々の希望をもたらした。ヨーロッパから逃れてきた難民にとって最初の明るい変化は、外の世界とのつながりが全面的に回復したことと、待望の資金がコミュニティに流れてきたことである。また米軍の到来は新たな職とチャンスを生み出した。さらにユダヤ人たちは移動の自由を得、第三国に出国して家族や親族との再会を果たすことが可能になった。こうして大半のユダヤ人は国外に出て行くことを考え始めたが、それは当然の成り行きであった。ユダヤ人が中国に渡ってきたのは、自らそう望んだからではなく、単に他に行き場がなかったからであり、ホロコーストから逃れてきたものの、彼らにとって中国は永住の地にはなりえなかったのである。こうしてビザが取れば、アメリカやカナダ、オーストラリアなどが移住の候補地となったが、当時ほとんどの国はユダヤ人の受け入れ態勢を十分に整えていなかった。もう1つの選択肢として浮上したのが、建国したばかりのイスラエルへの移住である。建国直後の1948年、イスラエル政府は上海に事務所を開設して<sup>8)</sup>ユダヤ人に移住を呼び掛けた。こうしておよそ1万人のユダヤ人がイスラエルに渡って行った。

一方、一世代以上の長期にわたって中国に暮らしてきたセファルディ系ユダヤ人とロ

シア系ユダヤ人は、多くの者が中国に留まる道を選び、ある者は投資を始め、ある者は事業の再建に乗り出した。しかし彼らの希望は、1946年に国民党と共産党の間で勃発した内戦により、早々に打ち碎かれた。こうして中国に残ったユダヤ人たちもまたこの国を去って行った。サッスン家やカドゥーリ家など、上海の有力なユダヤ人一族は事業を別の場所に移した。サッスン家はバハマで事業を軌道に乗せ、またカドゥーリ家は香港を永住の地と定めて、そこに彼らの帝国を築き上げた。

1949年に共産党が権力を掌握する頃には、ほとんどのユダヤ人が中国を去っていた。この時点でもなお数千人が中国国内に残留していたが、彼らも次々と中国を離れ、10年後には誰も残らなかった。

1950年代は、中国におけるユダヤ人ディアスポラの歴史にとって特別な意味を持つ。この時期、歴史の継続性は断ち切れ、1つの時代が終焉を迎えた。中国社会の急激な変化により、ユダヤ人がこの国で充実した生活を送り、事業を構築することがもはや困難になったのである。様々な時期に異なる思惑を抱いて中国に渡ってきたユダヤ人たちは、この国を出て行く時が来たと悟り、年間何千人もが国外へ去って行った。必然的に1950年代には中国のユダヤ人人口は減少の一途をたどり、この時期の半ばにはその数は1000人を切るまでに激減した。ユダヤ人がいなくなったために、当初設立された様々なユダヤ人組織は、あるものは消滅し、あるものは吸収された。ユダヤ人コミュニティ協議会は、中華人民共和国建国後の1949年に上海で設立され、中国在住ユダヤ人の生活支援を目的とした任意慈善団体として上海軍事委員会外務部に1950年9月1日付で登録された組織であるが、全米共同配給委員会が1951年に上海事務所を閉鎖した後はこの協議会が世界各地に散らばってゆく中国在住ユダヤ人の帰還と再定住のための管理業務を引き継ぐとともに、中国に在留するユダヤ人のための組織として、その生活支援の責任を担った。またアシュケナズィ系ユダヤ人とセファルディ系ユダヤ人のコミュニティ協会は過去50年の間独立して運営されていたが、1956年7月に両者の資産と業務が統合され、最終的にこの協議会に吸収された。さらに同協議会は上海だけでなく、天津とハルビンのユダヤ人コミュニティの代表も務めており、これらコミュニティの一般予算と移住関連業務を担当していた。その年次報告書にはすべてのコミュニティが網羅されている。1958年に天津ヘブライ協会が解散したときにも、天津に在留するユダヤ人の生活を支援する責任が同協議会に全面的に移転されている<sup>9)</sup>。

中国に留まったユダヤ人の大多数は、1950年代に入ると経済的、財政的苦境を強いられた。その大半が中国を出る計画をしていたためである。彼らにとって差し迫った問題はもはやいかに中国国内で生活や事業の基盤を確立するかということではなく、いつどのようにしてこの国を去るかということであった。

中国を出て行く者の割合は依然高く、毎年25%強であった。たとえば1955年から1956年6月までの期間に283人のユダヤ人が中国を去っている。内訳は上海113人、ハルビン139人、天津15人、大連7人、青島10人で、移住先にはばらつきがあるが（13カ国+香港）、統計ではイスラエルに向かった者が最も多く（131人）、次いでソビエト連邦（90人）が続いている<sup>10)</sup>。

ユダヤ人コミュニティ協議会によると、1956年6月30日時点で中国には519人のユダヤ人が残留していた<sup>11)</sup>。コミュニティの縮小は信仰生活に大きな支障を来すことになった。普段の信仰は継続されていたが、シナゴグの維持費の捻出が難しくなってきたのである。

数年前から上海では、1941年に朝陽路に建設された「新シナゴグ」だけが唯一機能していた。しかし信徒の数が減少し、ユダヤ人住民の経済状況が厳しさを増す中、もはやこの巨大シナゴグを維持できるだけの余力は残されておらず、最終的には建物を処分するという決定が下された。こうして1956年7月に取引がまとまり、建物は中華人民共和国政府の家屋土地管理局に売却された<sup>12)</sup>。これは同局が高値を付けたためである。地元コミュニティが所蔵していたトーラーの巻物数巻と多数の宗教書はイスラエルに送られ、宗教省に寄贈された。

しかしシナゴグの建物が処分された後も、ユダヤ教センターに設けられた祈祷所では引き続き安息日や祝祭日の礼拝が行われていた。ユダヤ教の儀式に基づいてマツァー（酵母の入らないパン）が作られ、困窮している上海のユダヤ人全員に無料で配布された。また過越祭の前には、百ポンド単位のマツァーが汽車で天津に運ばれ、現地のユダヤ人の元に届けられた<sup>13)</sup>。

以上の経緯からも分かるように、近代中国でおよそ100年にわたって続いたユダヤ人ディアスポラは、1950年代末に向けて徐々に終息していった。かつて極東一栄えていたユダヤ人コミュニティはその活動を終えた。中国で文化大革命が始まった1966年まで国内に残っていたユダヤ人は少数の高齢者だけであり、彼らも程なく中国で生を終えた。こうしてユダヤ教の信仰は中国本土から完全に姿を消してしまったかに見えた。

## リバイバル

---

しかし中国におけるユダヤ人ディアスポラの歴史は終わっておらず、またユダヤ教の信仰が消滅したわけでもなかった。1979年、中国は外国人の投資誘致と、欧米諸国はじめ世界各国との関係構築を目的に改革開放政策を打ち出し、これを機にユダヤ人が中国に戻って来たのである。現在北京や上海などの都市には少なからぬ数のユダヤ人が居住

している。仕事や投資、留学を目的に中国で暮らすユダヤ人が増え、ユダヤ教は再び中国社会の一角を占めるようになった。

上海がコスモポリタン都市としての性格を強める中、ユダヤ人は現地でますますその存在感を増していった。1990年代半ばには上海ユダヤ人コミュニティが新たに組織され、その直後の1998年8月にはハバド・ルバヴィッチ派のラビであるラビ・シャローム・グリーンバーグがニューヨークから上海に着任して、成長途上にあるユダヤ人コミュニティに新たな命を吹き込んだ。また同年、ニューヨークのアピール・オブ・コンシャス財団理事長、ラビ・アーサー・シュナイアーより、セーフエル・トラー1巻がコミュニティに贈られている。コミュニティは現在数百人規模に拡大しており、上海では日常的に安息日の礼拝が行われ、食の規定に準じて調理されたコーシャー食が供されている。ユダヤ教の教育も始まっており、子ども向け、大人向けのクラスや、バル・ミツバとバト・ミツバについての研修会、ブランチの会食などが行われている。1999年9月のローシュ・ハ・シャナー初日には、1952年に閉鎖されたオヘル・ラケルで、数十年ぶりにユダヤ教の新年祭を祝う礼拝が行われた<sup>14)</sup>。

2001年、コミュニティはオフィスセンターの建設に着手した。上海の1720 Hongqiao Road, Villa #2に開設されたセンターには、シナゴークや、コーシャー食用のキッチン、ミクヴェ（沐浴場）、学校が併設されている<sup>15)</sup>。

## ユダヤ教に対する中国の政策

---

以上からも分かるように、ユダヤ教は中国で非常に長い歴史を刻んできた。では歴史的に見て、中国はユダヤ人とその信仰に対して何らかの対策を講じてきたのだろうか。講じてきたのだとしたら、それはどのようなものだったのだろうか。この点に直接触れた文献は存在しないが、中国の為政者が一貫して「相手の信仰を尊重しその習慣や伝統に介入しない」<sup>16)</sup> という鷹揚な方針を採ってきたことは史料からも明らかである。この方針はユダヤ人とユダヤ教に限らず、すべての外国人とその信仰に適用されている。このように中国の歴代王朝や政府はユダヤ人に対して寛容な態度で接し、シナゴークの建設も含め、ユダヤ人が国内で日常的に宗教活動を実践することを認めていたのである。

こうした姿勢は、開封のユダヤ人の事例によく表れている。開封のユダヤ人が残した石碑には、宋代の皇帝がユダヤ人に対し、当時の中国の首都に住みユダヤ教の伝統を守ることを許していたと記されている<sup>17)</sup>。

しかしこの姿勢を最も明確に表明しているのは、1642年の黄河の氾濫で失われたシナ

ゴークに代わる新しいシナゴークが完成した際に、清の皇帝が献呈した横長の銘板と、現地の政府高官が寄贈した縦長の銘板および二行連句を記した垂れ幕だろう<sup>18)</sup>。

また開封では「部外者と豚肉の運搬者はシナゴークの近くを通ってはならない」という規則が施行されていたこともある<sup>19)</sup>。この事実は、開封のユダヤ人が信教の自由を全面的に享受しており、かつその習慣が尊重されていたことを物語っている。ディアスポラの歴史を通して、ユダヤ人がこれ程優遇されていた時代は他に例がない。

中華民国時代（1912年－1949年）には大勢のユダヤ人がヨーロッパから中国に移り住んだ（その数は合計4万人を超える）。この事実は間接的にはあるが、政府当局がユダヤ人とユダヤ教に対して寛容な方針を採っていたことを示している。中国に居住し、組織を立ち上げ、シナゴークを建設する許可を得たユダヤ人たちは、信仰生活も含めて今まで通りの生活を継続することができた。中国政府はシオニズム支持を表明する声明を何度も出しているが、ユダヤ人とユダヤ教はシオニズムと直接結びついているため、こうした声明はユダヤ人とユダヤ教に対する中国の姿勢を表しているものと解釈していいだろう。たとえば中華民国の国父として知られる孫文は、1920年に、当時上海シオニスト協会書記官を務めていたN・E・B・エズラ宛に書簡を送り、ユダヤ民族の理念を支持する意思を伝えている。書簡には次のように書かれている。「貴方のお手紙とイスラエルズ・メッセンジャー紙の記事を大変興味深く拝読いたしました。現代における偉業の1つであるこの運動に私は共感いたします。この運動は、世界の文明に多大な貢献を果たし、国際社会の中で名誉ある地位を占めるにふさわしい歴史ある偉大な国家の再建を目指すものであり、民主主義を愛する者なら誰もが支持を表明せずにはいられないでしょう」<sup>20)</sup>。

特に第二次世界大戦中、中国政府はヨーロッパで迫害を受けるユダヤ人に同情を寄せ、1939年には、ドイツ占領下のヨーロッパで虐げられているユダヤ人のために、中国南西部に居住区を設ける計画を打ち出して、ユダヤ人の救済に乗り出した。この計画は、中国人民と同じ条件で暮らし、働き、国の保護を受ける権利をユダヤ人難民に保証するというもので、その背景には、1938年の一連の出来事を境にユダヤ人をめぐる状況が一段と厳しさを増したという事情があった。1938年の出来事とは、第三帝国によるオーストリア併合（3月）、不発に終わったユダヤ人難民の受け入れに関するエヴィアン会議（7月）、「水晶の夜」事件（11月）、パリで起こったドイツ大使館書記官フォーム・ラート暗殺事件のことで、これを機にドイツ系ユダヤ人に対する迫害が激化し、ドイツとオーストリア全土で反ユダヤの嵐がとどまるところなく吹き荒れたのである<sup>21)</sup>。

第二次世界大戦にまつわる複雑な事情のため、この計画は結局実現しなかったが、こ

うした計画が発案されたということ自体、中国人と中国政府がユダヤ人の置かれた状況に同情し、支援の手を差し伸べようとしたことを示している。

歴史を振り返れば分かるように、1949年に共産党が権力の座に就いてからも、中国政府—特にユダヤ人住民を抱える都市の自治体—は、ユダヤ教に対して寛容な態度で接し、ユダヤ人がシナゴグを運営し、日常の宗教行事を行うことを認めていた。上海、天津、ハルビン等の都市では、ユダヤ教は当時から政府によって公認宗教とみなされていた。たとえば上海の新シナゴグは、ユダヤ教徒の減少が理由で1956年に閉鎖されるまでずっと使用されており、ユダヤ教の儀式が継続的に行われていた<sup>22)</sup>。またハルビンのシナゴグも1960年代まで使用されていた。

中国国内におけるこうしたユダヤ人の待遇は高い評価に値する。実際にどの文献を調べても中国がユダヤ人を迫害したという記録は一切見当たらない。現中国政府も、外国人を誘致するためには、彼らにとって魅力的な文化環境を作る必要があることを悟っているようである。宗教に対して相応の敬意を払うこともこうした文化環境の一環である。

これまでも当局は、ユダヤ教徒の要望に対して特別な配慮を払い、敬意を示してきた。例えば中国とイスラエルが国交を正常化した後、1993年にイスラエルのハイム・ヘルツォグ大統領が中国を訪問した際には、この歴史的出来事を記念して、上海政府がオヘル・モーシェの建物を博物館に改造している。2007年にはこの建物は全面改修され、1920年代の建造当時の状態に復元された。現在は年間何千人もが訪れる人気スポットとなっている。

また1998年には上海市が6万ドルを投じてオヘル・ラケルを史跡として整備した。1920年に建築されたオヘル・ラケルは、市内に現存する2つのシナゴグの1つであるが、ここでは、政府の許可を受けた上でユダヤ教の祝祭日を祝う行事が今も頻繁に行われている<sup>23)</sup>。

上海にはユダヤ人の生活に由来する建物が数多く残されているが、政府がその中でもシナゴグを選んで改修した理由はごく明白である。宗教儀式的場がユダヤ人の生活の中心となっていることを中国政府は理解しているのである。

ハルビンでは、876の墓標が並ぶユダヤ人墓地が中国当局により手厚く管理されている。このユダヤ人墓地は中国本土で最も良い状態で保全されているが、さらに保護の充実をはかるために、1996年の秋には中国政府の費用負担でフェンスとゲートが新たに設置された。現在もハルビン市は、現地のユダヤ人コミュニティが19世紀末から引き継いできたこの遺産を保全するために、様々な施策を講じている<sup>24)</sup>。

以上論じてきたように、ユダヤ教の信仰はユダヤ人が中国の領土に初めて足を踏み入れた時からこの国で連続と引き継がれてきた。信仰の有無を問わず、中国で暮らすユダヤ人が存在する限り、ユダヤ教はこれから先も実践されていくだろう。また中国が開放政策を推し進めていく限り、中国で働き、学び、暮らすユダヤ人の数は増え続けていくものと思われる。従って、ユダヤ教独自の性質、すなわちユダヤ教とユダヤ人は同時に歴史の舞台に登場したがゆえに、ユダヤ教はユダヤ民族の一部であり、ユダヤ民族なくしては存在しえないことを理解するとともに、建設的かつ前向きな態度でユダヤ教に接することこそ、我々にとって何よりも必要で大切なことなのである。

---

## 注

- 1) 本稿で「近代以前の中国」という場合は、英国との間で阿片戦争が勃発した1840年以前の時代を指す。近代の開始時期は1840年から1842年とみなされている。
- 2) この記録とは、開封のユダヤ人コミュニティが残した3つの石碑を指す。それぞれ1489年、1512年、1663年に作られたもので、いずれも開封のユダヤ人研究のための直接的資料とみなされている。1489年と1512年の石碑は現物がそのまま残されており、現在は開封市博物館に保管されている。1663年の石碑の現物は失われてしまったが、拓本が残されている。
- 3) Wang Yisha, *Spring and Autumn of the Chinese Jews* [《中国犹太春秋》], Qingdao: Ocean Press, 1984, p.184.
- 4) 開封のユダヤ人の生活については英語の書籍が多数出版されており、様々な角度から詳細な検討が加えられている。特に参考になる書籍を以下に記す。William C. White, *Chinese Jews*, University of Toronto Press, 1942; Donald Daniel Leslie, *The Survival of the Chinese Jews: the Jewish Community of Kaifeng*, Leiden, 1972; Michael Pollak, *Mandarins, Jews, and Missionaries*, the Jewish Publication Society of American, 1980; Xu Xin, *The Jews of Kaifeng, China: History, Culture, and Religion*, KTAV Publishing House, 2003.
- 5) C. E. Darwent, *Shanghai: a Handbook for Travelers and Residents*, Shanghai, 1920, p. 30.
- 6) Maisie J. Meyer, *From the Rivers of Babylon to the Whangpoo: A Century of Sephardi Jewish Life in Shanghai*, Lanham MD: University Press of America, 2003, p. 96.
- 7) 上海のユダヤ人コミュニティについては、様々な角度から多数の書籍が執筆されている。代表的なものは以下の通り。David Kranzler, *Japanese, Nazis and Jews: The Jewish Refugee Community of Shanghai 1938-1945*, New York: Yeshiva University Press, 1976; Maisie J. Meyer, *op. cit.*; Pan Guang and Wang Jian, *Jews in Shanghai since 1840s: An Oriental Page in the Annals of Jewish Diaspora*, Beijing: Social Sciences Documentation Publishing House, 2002.
- 8) Isador A. Magid, "I Was There," in *China and Israel, 1948-1998: A Fifty Year Retrospective*, ed. Jonathan Goldstein, Westport CT: Praeger, 1999, p. 43.

- 9) *Annual Report of the Council of the Jewish Community (1958-1959)*, Shanghai: Hoover Institution Archives, p. 16.
- 10) *Annual Report of the Council of the Jewish Community (1955-1956)*, Shanghai: Hoover Institution Archives, p. 11.
- 11) *Ibid.*, p. 15.
- 12) *Ibid.*, pp. 6-7.
- 13) *Ibid.*, p. 5.
- 14) <http://www.chinajewish.org> (2003年6月28日アクセス)
- 15) ウェブサイト参照。 [www.chinajewish.org](http://www.chinajewish.org)
- 16) 中国語では「尊其教而不易其俗」という。
- 17) 1489年の石碑に、中国皇帝と開封のユダヤ人が交わした次の「3つの約束」が記されている。「中国人に溶け込む、先祖伝来の習慣を尊重し維持する、開封の地でかかる習慣を守り、伝えていく」。
- 18) 以下の書籍にその全文が記載されている。White, *op. cit.*
- 19) *Ibid.*, p. 80.
- 20) Sun Yat-Sen, "To N.E.B. Ezra," *The Collected Works of Sun Yan-Sen* Vol. 5., Beijing: Zhonghua Shuju, 1985, pp. 256-57.
- 21) "Chungking National Government Programme for the Placement on the Jews in China," *Republican Archives*, No. 3, 1993, pp. 17-21. 以下も参照。Xu Xin, "Sun Fo's Plan to Establish A Jewish Settlement in China During World War II Revealed," *Points East* 15: 3 (March 2001), pp. 1, 7-8.
- 22) "Report of Council of the Jewish Community Shanghai of July 1955-July 1956," The Hoover Institution Archives, Hoover Institution.
- 23) Seth Kaplan and Matthew Trusch, *Ohel Rachel Synagogue*, Shanghai: The Jewish Community of Shanghai, 2000.
- 24) Xiao Tongyan から Mr. Kaufman への書簡。 *Israel-China Voice of Friendship* (published by the Israel-China Friendship Society in Tel-Aviv), No. 17, p. 11.